

事実(出来事)にふさわしい人となる

—第13回CLインストラクターの会発表から—

横山 彰

yokoti1953@jcom.zaq.ne.jp



前回のCL研修会で発表したことを、季刊誌に載せてほしいとの依頼を受けてまとめました。題名は「事実(出来事)にふさわしい人となる」としました。

私が読んだ本を、そのまま記載したほうが内容が伝わるので、そうしました。

一冊目は、『地面の底が抜けたんです』藤本とし 昭和40年 思想の科学者

藤本としさんは、明治34年東京、芝で生まれました。大正8年縁談がととのった18歳の時、ハンセン氏病を発病しました。そのころには、まだ、特効薬プロミンは使われていませんでした。この本には、ハンセン氏病になってからの暮らしのことを書いています。全身の麻痺、手足の不自由さ、失明等々の障害がありながら、そこには明るさがあります。ひろやかさがあります。名もなき人には、底知れぬ力があることを教えてください。そして、私は、出来事にふさわしい人になる。事実そのものになることが、人間の力をもっとも豊かに表現することになると思いました。

○発病

自分の病気を初めて知らされた時ですけどねえ、もう、なんとというか…そりゃおどろきましたよ。いえ、知らされたっていいまでも、直接におしえられたんじゃないんでね、木下病院に紹介状をもらっていきましたでしょ、するとちょうど昼食の鐘が鳴って、患者さんがゾロゾロ出てこられたんですよ。そのお方たちを見た時にハッと気づいたんですけど…ほんとうにね…気を失ってしまって…立ってる**地面の底が抜けたんです**よ。あなたはお若いから、道端に座っておもらいしている病者をお見かけになったことはない…でしょうね、あのとおりですよ。結節とっておできのようなのができましょ、あれがひどくてねえ。あたしは子ども時分にしょっちゅう見ていましたし、お金をあげに行ったりしてたものだから、ああ、自分があの病気になったと思ったら、なんともいわれない、悲しい気持ちで…もう家にかえれないんだ、自分もああしておもらいして生きていくことになったんだ、そんな運命なんだと思った時には、ま、なんてえますかねえ…。

○通院

そう、当時の病状のことでしたね。麻痺は一いえ、この病気は**麻痺**がいちばん先にくるんですよ。ですから手足なんか五指が揃っても、よく火傷します。麻痺のために。麻痺が深くなっても、まだこの内股の、ここんところか、腋の下のこのへんとかには感じが残ってますよ。わずかですけど。それが、こっちの外側の方なら、切ろうが焼こうがわかりやしません。おかしいんですけど…。

○結婚

歩くといっても、足の裏に感じがありませんのでね、どういうところを歩いているのか、どういうところからどっちに行ってるのか、それがねえ、わかりにくうございましてね…。この足裏の麻痺がまたね、こわいんです…。釘を**踏み抜いた**なりに歩いちゃう、平気で。手だってそれは同じですよ。おつけものといっしょに、自分の指をきざんだ盲人さんもおられるのです。この病気は、どこもかしこもみんなし

びれてしまいますけど、**舌だけ**は麻痺しない。あたしも目を失くしてからは、ほんとうにそれで助かりました。特におじいさんが病んでからは、なんでも囁んでたべさせてあげるのですが、硬さも熱さも、みんな舌があってこそね、わかるのですから…。だけど、入歯を洗ってあげることができなくなったのはつらかったです。ですが、これも舌に助けられたんです。入歯を洗うのは、他人（ひと）さまには頼みにくい。いえ、お願いして、やって下さらないことはないのですが、他人（ひと）の入歯を洗うというのは、気持ちのいいものじゃありません。…というのは、食べカスがついたりして、ヌラヌラしますでしょ。それをあたしは、目がいい時は、ブラシの硬いので何回も何回も洗いましたけど、**目が見えなくなると、ブラシがあってもこすられんのです。すぐに落とすんです。手が麻痺していますから、持っているものやらなにやらわからなくなるんです。目が見えなくなってわかるのは、それまで目でこすってたんです。目で持ってたんですよ。手でこすったり持ったりしてたんじゃないですねえ。**それで、しょうがないから、あたしは、**自分の歯**でみんなカスを取って、そして**舌**でさぐってみて、これでどこにも汚れはない、みんな取れてると確かめてから、おじいさんに入れてあげました。これは、あたしが**目を失って**から九年間、やりとおしました。

○失明

だけど読み書きはねえ。耳や鼻じゃできませんので、点字を読むたって、このとおり**指がありません**ので、これは苦勞しました。ええ、**舌**で読むんです。ところが、舌ではなかなか文字になってこないのです。点字をうってある垂鉛版をね、こうして捧げ持って、**舌で読む**練習をするのですが、あれは舌が痛くてねえ。すぐに舌の先が破れて、練習板が血で**まっ赤**になるんです。それでも、これで読めるようになると思うとうれしゅうございました。痛さもつらさも忘れて、一生懸命でやりました。

うつ方も、相当いいところまで行ったんですけどね。なんていんでしょうか、点筆をちっとやそっと手首にくくりつけたんじゃ駄目なんです。力が足りなくて。点字をうつ、あの細い定規みたいなご存知でしょう。あの小さな長方形の中に六点うつんですから、アなら一点、イなら二点。その二点でも横にうったり縦にうったり、いろいろありましよう、そういうふうにうつんですから。それを一所懸命、この手の甲のところにゴムのところにゴムでキューツとペンをくくりましてやってたんです。ですけど、すぐしびれて手が効かなくなってしまうんです。それに手だけでは力が足りないもので、**頬**でうつんですよ。それが痛くて。

○盲人の笑い

はじめのころは、ともかく死にたい、一時（いつとき）も早く死のうなんて、そんなことばかり考えていましたけど、今から思えば、あたしは**ライに生かしてもらった**んですね。悲しい、つらいと言いながら、その悲しさ、つらさにつかまらせてもらって生きることができたのです。おかしい言い方ですけど、**ライに頼って生きてこれた**のです…。

死に切るといというのは、まあ、言ってしまうえば、苦しきであれ、悲しきであれ、**徹底してひきうける**ってことですかねえ。逃がしきれるものなら逃げますけれども、もう、どっちむいたってどうせ苦勞なんですもの、同じ苦勞なら、いやいややったってしかたがないんです。それまでを、すっかり捨て切ってしまうって、いっそおもしろくやってやろうと…そうでなければ、グチだけが残ることになります。だけど、捨て切るっていうのは、なかなかのことじゃありません。

○生きている

あの日も快晴であった。ひとまわり散歩をして、楓蔭亭にゆく坂下まできたとき、私はなんとかして一人で亭まで行ってみようという気をおこしたのである。これまでも何度そう思ったことかし

れない。理由は、内海の風景はもはや見るよしもないが、そこにある四季それぞれの長閑さに私は心をひかれていて、人手を借りずに行けたなら、おりおりそこに坐して、松風や笹生の香や、草をけるキチキチバッタなどの中にいたいという、切な望みがあったからだ。

しかしいざとなると、無感覚のうえに数回の手術で、すっかり変形した足には自信がもてず、杖は突くたびに両手の中でぐらぐらする頼りなさに、つい氣勢をそがれて思いはいつも立消えになっていたのである。

だがその日はちがった。どうしてもという気であった。私は杖を右に向け、左に向けして、恐ろしい崖ぶちを確かめると、一步を踏み出す地をたたいた。この時である、見知らぬお婆ちゃんが私に声をかけたのは。わたしは心の一部をかくして、「亭まで行こうと思うのです」とだけ答えた。「そうか…。わてもあそこに行くんよ、ちょうどいい、連れになろうや」お婆ちゃんは、ぽんと私の背をうった。やがて二人は手に手をとって坂を登り始めたのである。意に反したが私は楽しくなっていた。が、そのうちにお婆ちゃんの歩みは私よりさらに頼りないのに気がついた。わたしは組んでいた手に力をこめるとお婆ちゃんの体を支えはじめたのである。よいしょ！

坂はだんだん急になり、歩行はいよいよ千鳥になったが、お婆ちゃんのかげ声だけは威勢がよかった。「ほーら着いたぜ、あとはコンクリートの段を六つ七つ登るだけや」どうにか目的場所に来て、お婆ちゃんは明るく言ったが、私は当惑してしまった。段がもんだいなのである。もうお婆ちゃんの足は頼れない。杖はなおさら駄目である。どうしようか…と思いつまどっている耳もとで、声がした。「早う這わんかい。わては、いつも這うて登るのや、らくだぜ」。

私は杖をぐっと帯にさしこんだ。突くほうを空にむけて。ふたりは一心に、陽光のなかを、うごめくような**藁(がま)の歩み**をつづけたのである。ようやく亭に腰をおろしたとき、お婆ちゃんはあたりかまわぬ声で笑った。その、けろりとしたひびきが真下の海にころげていった。

このとき私は、この新患のお婆ちゃんから、わが手で生の歓びをかちとるために、**残された可能を、えぐりだす**ことを学んだのである。

次は、『私の尊敬する人』1990 講談社出版研究所 講談社 からの一節。

＜「浦上だからよかった」あるお婆さんの一言 谷川雁＞を紹介します。

その人に会ったことはありません。名前も知りません。それなのに、長崎市の浦上地区に生まれ、そこに育ったお婆さんの一言が、もう三十年も私の耳について離れないのです。この話を、私は友だちから聞きました。

友だちはある夏、長崎市の病院に入院しているたくさんの原爆患者を見舞いました。そこにいたひとりのお婆さんが、見舞いのことばに答えて、こう言ったというのです。

「原爆が浦上に落ちたから、まだよかったですよ。信仰のない人たちだったら、なかなかこらえきれんでしょう」。すると、まわりのお婆さんたちも口々に「そうだ、そうだ」とうなずいたといいます。みんな浦上の出身だったのです。

浦上地区は、徳川時代にキリスト教が禁止されたのちも、ずっと信仰を持ちつづけた「隠れキリシタン」の地区で、信仰が自由になってからはカトリック信者としてつつましい日々を送っていた人たちのふるさとでした。三百年の禁教の期間に、何回も地区を根こそぎにした弾圧があり、何千人もの殉教者を出しながらも、ひるむことなく信仰を守りつづけた…。一九四五年（昭和20年）年



八月九日午前十一時二分原爆が投下され、浦上は**爆心地**となったのです。

見方によれば、キリスト教文明の軍隊が、異国のなかにあるキリスト教の神聖な場所を襲ったことになります。そして、こともあろうに攻撃の手段は原爆でした。家族や親しい者の大量死、自分自身の負傷や後遺症にもまして、神によって守られてよいはずのこの地が、神によって見すてられたかのようなこの事実を、浦上の人たちがどんなに痛ましく感じたか。さきほどのお婆さんたちのことばは、そこをくぐりぬけて出てきた、透きとおった感情の一滴です。それにしても何という広やかさ、何というあかるさでしょう。

三冊目は、『過去と和解するための哲学』山内志朗 2018 大和書房です。

ジョー・ブスケ(1897~1950)はフランスの文学者であり、第一次大戦に志願して中尉となり参戦します。1918年5月18日一発の銃弾が両肺を貫き、脊髄を損傷し、21歳で**下半身不随**となり、1924年から死に至るまで南仏カルカソンヌでベッドに横たわって**執筆**します。

戦争で受けた傷について、それを恨んだり呪ったりするのではなく、「**傷にふさわしい者**」になることをめざし、傷をつけた出来事を意欲することが彼の経験の企てでした。ブスケはこう考えました。ブスケは「私の傷は私よりも前に実在していた。私は傷を受肉するために生まれた」と記す。すごい言葉です。ブスケは、傷を呪うのではなく、それどころか、**傷にふさわしい人間**になろうとする。傷が先にある、その後、<私>が生まれたというのです。私に受けた「傷」はアイデアの如く永遠なる先在としてあって、それを具体化し、受肉し、その一例となるべく、生まれたというのです。

.....
この三人に共通するのは、「**~にふさわしい人になる**」ということです。藤本としさんは、「ハンセン氏病者にふさわしい人になる」浦上のお婆あちゃんは「原爆被爆者にふさわしい人になる」ブスケは「半身不随者にふさわしい人になる」

それぞれが、耐え難い現実・出来事を「怨み」、このような出来事が出現する前の状態に「戻ろう」とせず、この現実を徹底的に引き受けます。引き受けている私が事実そのものとなります。そこが、出発点です。そこから、自分自身の内外のリソースを探します。自分の可能性をえぐり出すのです。

(東京都武蔵野市インストラクター)

 [目次へ戻る](#)